

継承の架け橋

池田 晃輔 (高校生)

「たった80年前？」

生まれながらにスマホやインターネットが身近にあるZ世代にとって、戦火にまみれた80年前の日本を想像するのは難しく、以前は歴史上の出来事のように捉えていました。しかし、戦争について学ぶ中で、当時日本が関わった戦争が今の国際社会に大きく影響していることを知り、戦争は他人事ではないと気付きました。戦争の惨禍を二度と繰り返さないために、戦争を過去の出来事として捉えるのではなく、深く掘り下げて原因や背景を学び、記憶を継承して事実を認識し、その教訓を自分事化して、一人ひとりができることを実践することが大事だと考えます。

私は平和活動を行う中で、被爆者の生涯続く苦しみや無慈悲に命を奪われた魂の叫びを知りました。広島平和記念資料館や昭和館、横浜在住の96歳女性の長崎被爆講話、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)との交流、平和記念式典への参加などを通して、罪の無い人が犠牲にならない国際社会にしなければいけないという思いを強くしました。語り部の方から「もう二度と被爆者を作らないでほしい」という切なる願いを聞きました。記憶のバトンを未来に引き継ぐために自分に何ができるか考え、一步を踏み出しました。

国内外の多くの学生と共に学んだ国際青少年平和セミナーでは、昨年ノーベル平和賞を受賞した日本被団協の箕牧代表委員が「ロシアのウクライナ侵攻で核の脅威が高まる中、核兵器廃絶を国内外にさらに訴える必要がある」と話されました。質疑応答で私は箕牧さんに、後世に残す上で一番大切なことは何か質問したところ、「今の若い人は戦争をあまりに知らなすぎる。多くの人に広島を訪れて原爆のことを知ってもらいたい」と答えて下さいました。核兵器は全てを消滅させるものなのに、その恐ろしさや残酷さを知らない人が地球上にまだたくさんいます。原爆の実態を国内外に広く知ってもらうことが行動の起点となります。そして核保有国にこそ核兵器の脅威を知ってもらいたいと思いました。

私はアメリカで生まれ日米両方の国籍を持っています。広島と長崎への原爆投下を肯定する米国人はシニア層を中心に一定数います。原爆投下により戦争を終わらせたという当時の社会認識に影響を受けていると考えられます。しかし今年米国内で行われた世論調査によると特にZ世代に意識の変化が表れています。「原爆投下は正当化できる」「できない」の全体平均は35%と31%ですが、若者層の「正当化できない」は44%で、「できる」の27%を上回りました。平和記念資料館を訪れた米国人のうち、原爆投下を肯定していた人の半数近くが見学後に考えを改めています。また核戦争に

関する講義がきっかけで高校生が核廃絶運動を始め全米各地に輪が広がっています。こうした例から、原爆に関して心を揺さぶられる体験があったか否かで、核に対する意識に違いが出ると分かりました。

一般的にアメリカの学校で使用される原爆の記録は米軍が上空で撮影した巨大なきのこ雲の映像や、廃墟と化した市街地や体の一部に火傷を負った生存者の写真などです。被爆証言や戦争資料館が伝える目を覆いたくなる惨状とは懸け離れています。そもそも8月6日に爆心地から半径2km以内の焼失地域で撮られた写真は確認されていません。後世に残すべき記録は桁外れの爆発威力ではなく、きのこ雲の下で実際に起きた人間への被害です。それを伝える手段として何より力強いのは被爆者の証言です。調べたところ、インターネットで視聴できる英訳付きの証言映像はそう多くはありません。海外からも視聴できる英語字幕付きの戦争証言動画を充実させれば、より多くの外国人に原爆の実態を知ってもらい、核への意識を高めることができると考えます。そこで被爆者の方にも協力頂き、英語字幕付きの証言をSNSで発信する取り組みを始めました。私たちは戦争体験者の生の声を聞ける最後の世代です。日米両国に関わりを持つ自分の使命としてグローバルな記憶の継承に貢献していきたいと思います。

「過去に学ばない者は同じ過ちを繰り返す」という哲学者ジョージ・サンタヤーナという言葉通り、過去の過ちから学ぶことが大事です。なぜなら戦争は過去の一点でなく現在と未来に地続きで繋がっているからです。長い歴史の中でどの国にも文明や文化を築き上げてきた良い面と、戦争や差別や搾取など過ちを犯した悪い面があります。私達は歴史の両面を学ぶ必要があり、特に負の側面を後世に継承していくことが重要です。今なお世界各地で戦争や紛争が起きています。武器には平和を作る力は持ち合わせていません。最低限これだけは過去から学ぶべきです。戦争のない国際社会を実現するために、これからも平和を守り築く活動を続けていきたいと思います。

誰もが語り部

植中 和葉 （高校生）

私は戦争のどんな記憶を受け継いでいけばよいのだろう。戦争を経験したわけでも、その話をじかに聞いたわけでもない。そんな自分が知識でも資料でもなく、記憶を継承することに意味があるはずだ。そう感じた時、私の中に浮かんだのは、漠然とした責任感と、それを上回る数々の疑問だった。

果たして、私は「記憶」を継承できるのだろうか。そもそも、記憶を継承するとはどういうことなのだろうか。

私の先の戦争に関する記憶は二つある。

一つ目は、小学校の頃から高校生になった今まで、歴史の授業を通して学んできた記憶である。開戦から終戦に至るまでの経緯や過程、国民生活の変化などを年号や人物とともに必死に覚えた。時には動画や音声など、資料を見ることもあった。残酷なスローガンが掲げられたポスター、兵士の出撃前の肉声、そして原子爆弾が投下される様子。どれも現実とは信じがたいものだった。

二つ目は、曾祖父から祖母、父を通して私に語られてきた記憶である。曾祖父は兵士として戦地に赴き、銃弾が足を貫通して負傷し帰還したという。私は会うことができなかったものの、曾祖父の弾痕を見た家族の話だけでその戦傷は容易に想像ができた。

この二つの記憶には、どちらにも戦争の残酷さは刻まれていて、「二度と戦争をしてはならない」と思わせてくれるものである。しかし、両者には決定的な違いがある。

それは、事実と現実の違いである。学校での学びは、戦争についての正しい知識、つまり事実として記憶に残る。これはもちろん大切なことだ。しかし、それはどこか遠くの方で起こったことのように感じられてしまう部分もある。また、「学び」としての要素も強い。一方で、曾祖父の話は家族の中で直接伝えられてきた物であり、確かにそこにあった現実として記憶に残っている。身近な人の、身近な人から伝えられた話は戦争そのものを私にとってぐっと近いものにしてくれた。

こうした経験から私は、「記憶が身近な人から語られることで、その重みや意味が深まる」ということに気づいた。戦争を体験していない私たちにとって、記憶の継承に必要なのは、どれだけ多くの情報を知っているかではなく、それを自分の生活や人間関係の中にどれだけ引き寄せられるかだと思う。その時初めて「他人の記憶」が「自分の記憶」として継承されるのだと思う。

私は、今回の作文を書き始めた時、同級生と戦争について話すことがあった。身近に戦争経験者がいない友人には、教科書以外では映画でしか戦争に触れることがない

という人もいた。それがきっかけで、私と友人の間に戦争の記憶を共有する場が生まれた。友人にとって、私の曾祖父の話は「他人の記憶」だったかもしれないが、親しい関係の中で語られることによって、それは「遠くない記憶」に変わっていく。

また、友人のように戦争経験者を身内に持たない人は今後も増えていく。そうすると世間は戦争についての映画や物語などにますます注目していくと思う。戦争に触れる機会が増える一方でフィクションはより他人事、あるいは他人の記憶に留まってしまいうこともある。だからこそやはりより身近な人の言葉を通して現実として受け止めるべきだと思う。

そのためには、受け取った記憶を次の誰かに語りつなぐことが必要だ。今まで私は記憶継承のハードルをあまりにも高く考えすぎていたと思う。戦争に触れる機会が少ない友人にとって私の記憶は間違いなく一番現実味を帯びている。特別な立場の人だけが語るのではなく、私のような一人の高校生が、家族の話を友人に伝える。それだけでも記憶は確実に前に進む。そうして少しずつ輪が広がっていけば、戦争の記憶は単なる歴史としてではなく、「今を生きる人達の記憶」として生き続けることができるはずだ。

記憶の継承とは、戦争経験者に任せきるものではない。ただただ事実を知ることでもない。

記憶の継承とは、戦争を知る誰もが同じ重みのある記憶を持つことだ。自分のそばにある記憶を自分、家族、友人へと繋いでいく。そして、受け継いだ記憶から学ぶのはその人自身である。

私も、曾祖父から語り継がれていく小さな記憶を、小さな語り部として継承していきたい。

戦争を伝えるということ

植山 夏帆 （高校生）

1945年4月7日。太平洋の蒼い海に、日本の戦艦大和が沈んだ。当時17歳の曾祖母は、徳之島で戦艦に乗っていた兵隊の死体を引き上げる仕事に従事していた。海に浮かぶ兵隊たちは、腕や頭を失い、同じ人間とは思えない姿で漂っていた。息のある者には綺麗な水をゆっくり飲ませ、静かに看取った。曾祖母は、すべての兵隊に手を合わせ、真摯に向き合った。波間に漂う人影、赤く染まった海、潮の匂い。そのすべてが彼女の心に深く刻まれていた。

この話は曾祖母本人からではなく、娘である祖母から聞いたものだ。私は曾祖母の口から直接戦争の話を聞いたことはない。話すことに抵抗はないらしいが、戦争時の話をするには体力も時間も必要で、今ではもう聞くことができない。

先日、祖母が介護中に戦争について尋ねると、曾祖母はこう言った。

「血だらけの海を見て親友と逃げ出したから、なにも知らない。」

その言葉は、彼女が体験した真実かもしれないし、曾祖母自身の記憶が曖昧になって生じた偽りかもしれない。けれど、たとえ記憶が変わったとしても、それは彼女が見た現実の一部だと思う。私だって昔の恐怖体験を細部まで覚えているわけではない。ただ「怖かった」という感覚だけが鮮明に残り、あとから人の話や想像で記憶を補ってしまうことがある。戦争の記憶も同じだ。一言一句正確に残るわけではないし、語り継ぐうちに少しずつ形が変わる。だがその変化も含めて、語り継がれていくのだ。

曾祖父は特攻隊の生き残りで家族が当時の話を求めても口を開かなかった。

「自分は死にそこねただけだから。」

と繰り返していたという。

戦争の記憶を継承することは容易ではない。戦後80年、当時の記憶をもつ人々はすでに高齢だ。今から新しいエピソードを聞こうとしても、もう遅いのだ。私も遅かった。曾祖父は亡くなり、曾祖母は危篤である。だから、祖母の語った話に頼るしかなかった。

それでも、曾祖母が涙を流して語ったという祖母の話は、私の中で生き続ける。波の匂いや赤く染まった海の情景まで、私の想像を通して追体験するように、心の中で生きている。たとえ細部に誤差があっても、その体験を信じ、次の世代に語り継ぐこと。それこそが戦争の恐ろしさと平和の尊さを伝える唯一の方法なのだ。

戦争の記憶は、写真や映像のようにそのまま残せるものではない。語り手の年齢や心境、時代背景によって、同じ出来事でも伝わり方が変わってしまう。それは「正確さを欠いたもの」として否定されるべきなのではなく、人が人に伝えるからこそ宿る



「真実」でもあるのだと思う。曾祖母が見た血の海も、祖母の胸に残った恐怖も、そして今の私が感じる戦争の影も、すべてが時代を超えたひとつの体験として積み重なっているのだ。

今の私たちは平和な日常を当然のものとして過ごしている。しかし、その背景には、想像を絶する体験をした人々の存在がある。その記憶を継ぐということは、単に昔話を覚えるのではなく、彼らが見た世界の一端に触れ、自分の言葉で未来に伝えていくことなのだと思う。曾祖母が残した言葉は、もう直接聞けなくなる日が近い。だからこそ、直接聞いたという祖母の言葉を私の中で生かしていきたい。語り継ぐこと、それ自体が戦争の記憶を守る行為なのだから。

戦争を知らない私たちが、この記憶を受け継ぐことは、ただ過去を振り返るためだけではない。未来に同じ過ちを繰り返さないための責任であり、平和の価値を実感するための学びでもある。小さな一言、一言、祖母から聞いた情景や曾祖母の想いを思い浮かべることが、次の世代に平和の大切さを伝える礎になるのだ。そして、伝えるたびに自分自身も、その重みを胸に刻み、日々の選択や行動に生かすことができる。戦争の恐ろしさと平和の尊さを、ただの歴史としてではなく、自分の中で生きたものとして受け取り、未来につなげていく。それが、今私ができる最も大切なことだと思う。

語られた痛み、語り継ぐ私

碓井 愛美 （高校生）

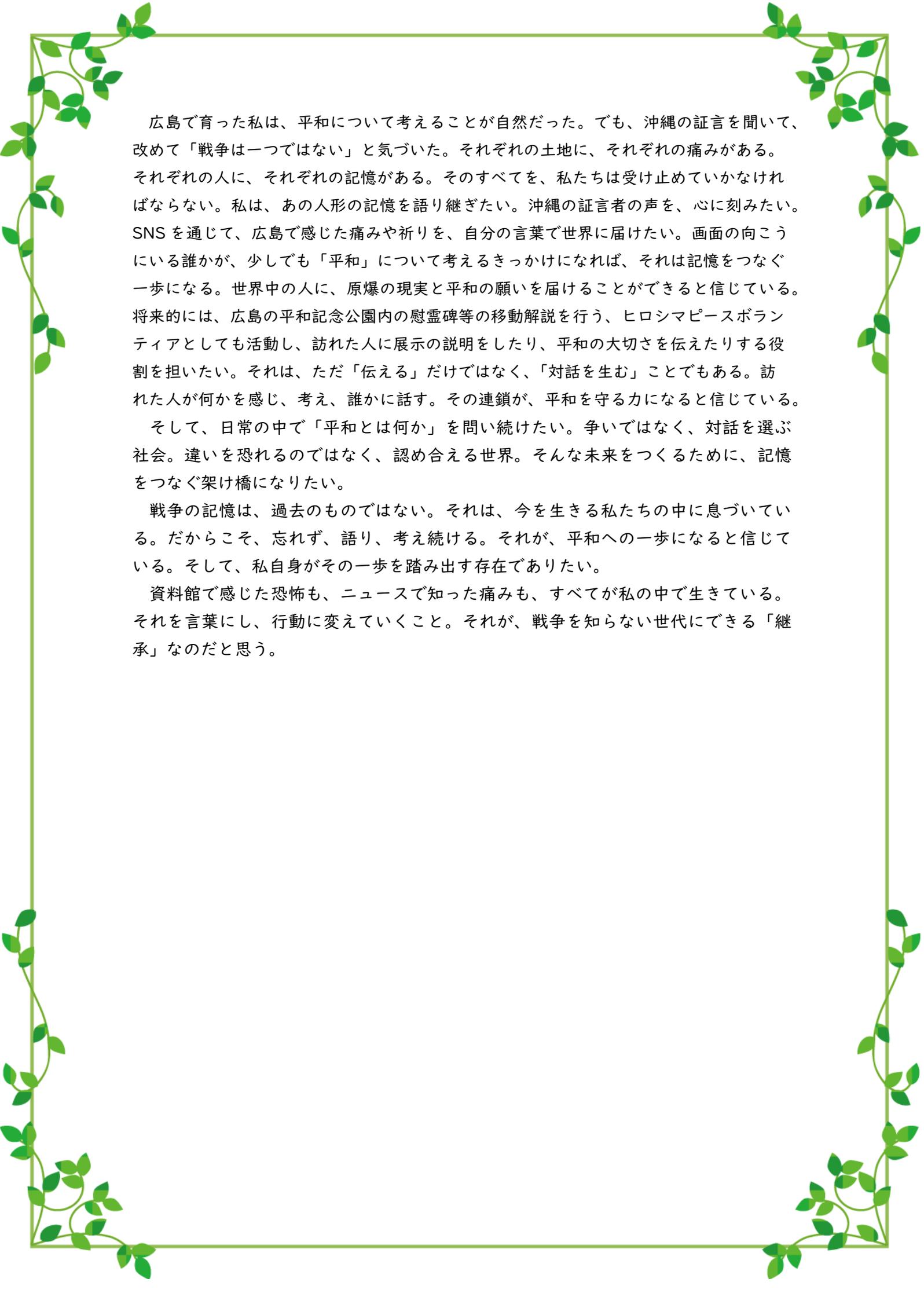
皮膚が焼けただけ、服は焦げ、両手を前に突き出して歩く——広島平和記念資料館で見た「被爆再現人形」の中でも、私と年の近い小さな子どもの人形が、今も記憶に焼きついている。小学校に入るか入らないかの頃だった。怖かった。でも、目をそらせなかった。自分とあまり年が変わらないように見えたその子も、原爆の惨禍に巻き込まれたのだと思うと、言葉にならない衝撃を受けた。その姿は、ただ「怖い」だけではなかった。「なぜこの子が」「どうしてこんなことが」と、幼いながらに問いが心の中に渦巻いた。10年以上経った今も、その感覚は消えていない。

私は広島で生まれ育った。平和について考えることは、特別なことではなく、日常の一部だった。毎年8月6日が近づくと、家族で原爆に関する特集番組を見たり、証言映像を視聴したり、平和記念式典に参加したりした。街の空気が少し静かになるその季節に、私は「平和とは何か」を自然と考えるようになった。資料館での記憶は、私の中でずっと生き続けている。

そして最近、たまたま目にした沖縄戦のニュースが、その記憶を強く揺り動かした。一人の男性が語っていた、集団自決の場面。手榴弾で死にきれず、わが子を殺していた父親の姿を見たという証言。その言葉に、胸が締めつけられた。亡くなった人の苦しみも、生き延びた人の苦しみも、どちらも深く、重い。「生き残ってよかった」と思えないほどの罪悪感。それは、戦争が人間の尊厳をどれほど奪うものかを、痛いほど教えてくれた。

広島で見た人形の記憶と、沖縄で語られた証言が、私の中で静かにつながった。どちらも、戦争の現実で、誰かが実際に生きた時間であり、痛みだった。教科書の中の歴史ではなく、血の通った人間の物語だった。そして、どちらも「忘れてはいけない」と私に語りかけていた。

私は、戦争を知らない世代だ。被爆二世や三世の方々が語る言葉には、家族の記憶が宿っている。けれど、そうでない私たちにも、記憶を受け取り、語り継ぐ力があると思う。資料館で実物を見て、語り部の証言に耳を傾け、心を動かされた者として、私にもできることがある。「体験していないから語れない」のではなく、「体験していないからこそ、知ろうとすること」が大切なのだ。資料館に足を運び、語り部の声に耳を傾け、映像を見て、記憶をたどる。それは、過去を学ぶだけでなく、未来を守るための行動だ。戦争の記憶は、ただ悲しいだけではない。そこには、命の重み、家族の絆、そして「二度と繰り返してはいけない」という強い願いが込められている。その願いを受け取ることが、私たちの役割だと思う。



広島で育った私は、平和について考えることが自然だった。でも、沖縄の証言を聞いて、改めて「戦争は一つではない」と気づいた。それぞれの土地に、それぞれの痛みがある。それぞれの人に、それぞれの記憶がある。そのすべてを、私たちは受け止めていかなければならない。私は、あの人形の記憶を語り継ぎたい。沖縄の証言者の声を、心に刻みたい。SNSを通じて、広島で感じた痛みや祈りを、自分の言葉で世界に届けたい。画面の向こうにいる誰かが、少しでも「平和」について考えるきっかけになれば、それは記憶をつなぐ一歩になる。世界中の人に、原爆の現実と平和の願いを届けることができると信じている。将来的には、広島の平和記念公園内の慰霊碑等の移動解説を行う、ヒロシマピースボランティアとしても活動し、訪れた人に展示の説明をしたり、平和の大切さを伝えたりする役割を担いたい。それは、ただ「伝える」だけではなく、「対話を生む」ことでもある。訪れた人が何かを感じ、考え、誰かに話す。その連鎖が、平和を守る力になると信じている。

そして、日常の中で「平和とは何か」を問い続けたい。争いではなく、対話を選ぶ社会。違いを恐れるのではなく、認め合える世界。そんな未来をつくるために、記憶をつなぐ架け橋になりたい。

戦争の記憶は、過去のものではない。それは、今を生きる私たちの中に息づいている。だからこそ、忘れず、語り、考え続ける。それが、平和への一歩になると信じている。そして、私自身がその一歩を踏み出す存在でありたい。

資料館で感じた恐怖も、ニュースで知った痛みも、すべてが私の中で生きている。それを言葉にし、行動に変えていくこと。それが、戦争を知らない世代にできる「継承」なのだと思う。

優秀賞

80年越しの声に答えて

大西 皆実 （高校生）

頭に響く蝉の声、肌を突き刺す強い日差し。そして、今と変わらぬように思えるその自然の中で、私と大して変わらない年齢の彼らは何を思い、何と向き合っていたのだろうか。

終戦から80年という節目の年に、私は一人である島を訪れた。穏やかな瀬戸内海の上にその島は静かに浮かんでいた。フェリーが港につくと、大きな看板が私を迎え入れた。そこに書かれた「回天の島」の4文字が、私の胸を静かに締めつけた。白く塗られた無機質のそれは、これから向き合う現実の重さを無言で突きつけてくるようだった。

私が回天の島、大津島に足を運ぶことになったきっかけは5年前まで遡る。当時中学1年生だった私は、ある小説と出会った。特攻隊を題材にしたこの小説を読み終えた後の、頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を今でも忘れられない。日本にこんなにも苦しい過去があったことに対して、何も言葉にすることが出来なかった。この衝撃から3年経った、高校1年生の夏、私は知覧の特攻平和会館を訪れた。目にしたのは、決してフィクションではない現実。感情を口にするこすら躊躇われた。簡単に涙を流すなんてもってのほかだった。少し触れただけで、分かったつもりになってはならないと思ったからだ。それでもあの場で過去と向き合ったとき、ただ静かに、どうしようもないものがこみ上げてきた。紛れもなくこのとき、この時代に生まれた私には、歴史について「知る責務」があると強く思った。

そこから少しの月日が経ち、高校2年生の春、大津島の存在を知った。何気なく覗いた周南市の観光案内板。私には「特攻兵器、人間魚雷『回天』訓練基地跡」の文字がやけに濃く浮かび上がって見えた。生まれ育った地元、山口にも特攻兵器の基地があったことに驚いた。それと同時に、戦争は過去の遠い出来事ではなく、自分の足元とつながっていたのだと感じた。だからこそ、この土地にどんな歴史が刻まれているのか、自分の目で見て、知る必要があると思った。

港から山道を上った先に、回天記念館は静かに佇んでいた。回天によって戦没した方たちの名を刻んだ石碑が並ぶ通りを抜け、記念館の中に入る。目に飛び込んできたのは、壁一面を覆う顔写真。出身も年齢も様々な彼らが、ここ大津島に集められ、出撃していった姿を思うと、胸が締めつけられた。中には17歳、私と同じ年齢の搭乗員もいた。彼らの未来が突然、戦争によって奪われてしまったことが悔しくてたまらなかった。しかし、そんな私の想いとは裏腹に、彼らが残した最期の言葉たちは、どれも前向きなものだった。

中でも回天の搭乗員の中で唯一残されている、肉声の遺書は印象的だった。家族との思い出や感謝の言葉が述べられたあと、最後は「みんなさようなら。元気で征きます。」と締めてあった。それは死を覚悟した声とは思えないほど、明るく力強いものだった。彼はどんな想いでこの言葉を残したのだろうか。その真意を考えても、私には分からない。ただここで考えることをやめてはならないと強く思った。戦争について学ぶ上で、私たちは決して傍観者であってはならない。彼の声に耳を傾けた自分が、問い続けることこそ、戦争を単なる過去の出来事にしないための一歩になると信じている。

一通り展示物を見終えたあと、記念館の中央に置かれた来館帳と芳名帳を手にとった。ページをめくると、北海道や東京など遠く離れた地から訪れた、11歳から70代までの幅広い年齢層の来館者の想いが綴られていた。

「もう二度と戦争をしてはならないと思った。平和な世界を築きたい。」
展示品を前にして感じた、まっすぐな言葉たち。きっと誰もが心の中で思っているだろう、その想いを自らの言葉として残す。平和への一番の糸口は、このまっすぐな想いをそれぞれが揺るぎなく持ち続けることだと思う。

記念館を出て、再び石碑の前を通る。行きとは違い、一人ひとりの名前に目を向け、思いを馳せた。数えきれない犠牲の上に築かれた現代を生きる私たちに、彼らが残した確かな「記憶」。その記憶を絶やさず、後世へと受け継いでいく責任を胸に、島を後にした。

帰りのフェリーの間、19歳で回天に乗り込んだ本井文哉さんの言葉が脳裏をめぐった。

「晴れの日、何日後、何年後に来るか知れない。しかし必ず来る。」

80年前、死と向き合いながらも、彼らは残された人の未来を信じた。しかし今もお、世界では紛争が絶えず、「平和」とは言いがたい現実がある。命をかけて彼らが願った未来の実現のため、世界が晴れるその日まで、私たちは問い続け、伝え続けていきたい。

曾祖父が持ち帰ってきた手袋

小田島 誠慈 （高校生）

「前の晩まで一緒に喋ってらった人が、次の日の朝、隣で冷だくなってらった。」

これは、シベリアに抑留された曾祖父が、生前幼い父に語った言葉だ。ある日、ぼつりとシベリアでの体験を話してくれたそうだ。まだ小学校低学年だった父にとってはあまりに衝撃的な話だっただけに、今でもその時の様子を鮮明に覚えていると話してくれた。私はその話を父から聞いたのもまた、小学校低学年の頃だった。父は、自分の体験を同じ年代の私に追体験してほしいと願い、曾祖父から聞いた話をいくつか話してくれた。小さい頃からドイツで育ち、日本の歴史や文化を知る機会が少なかった私にとって、曾祖父のシベリア抑留の体験談は衝撃そのものだった。

曾祖父がシベリアから持ち帰ってきた手袋が、新宿にある帰還者たちの記憶ミュージアム（平和祈念展示資料館）に展示されていることを知ったのは、私が高校入学を機に日本に戻ると決めた時だった。実際に家族と一緒にミュージアムを訪問して曾祖父の手袋を見た時、直接会ったことがない曾祖父と出会えたような気がした。

曾祖父が収容されたのはバイカル湖近くの小さな町で、冬の最低気温はマイナス 40 度を下回ることもある地域だ。最小限の食事しか与えられず、極寒の地での過酷な労働を強いられた。約 2 年の抑留生活から戻って来てからしばらくして曾祖父は入院したそうだが、病院のベッドに曾祖父がいないと家族が見間違えるほどに体が薄くやせ細っていたそうだ。そのような状態になっていても大切に持ち帰ってきた手袋は、曾祖父にとっては大事な相棒のようなものだったのだろう。当時の曾祖父の思いが書かれた文章をミュージアムの学芸員の方から見せていただいた。

「手袋を身に着けあの酷寒の中、雪に尻を冷やし、空腹に耐えて背を丸め、二人引きの鋸を引き合った伐採作業や、重い足を引摺って作業場に往復したあの姿が思い出される。この品はシベリヤでの苦労の想出とするため、ようやく持ち帰って大切に保存していた。」

80 年という月日は、私にとってはとても長い年月であることに変わりはないが、こうして曾祖父が記した文章に触れると、80 年前の記憶を決して遠い過去にはしてはいけないという思いと、これからどのようにして曾祖父たちが体験した出来事を多くの人たちに伝えていくことができるだろうかという心配にも似た思いが、心の中で入り混じった。

曾祖父のシベリア抑留体験のすべてを知ったわけではないが、その遺族の一人として何か活動できないかと思い、高校の友人と一緒に「シベリア抑留と平和」というテーマで探究活動を始めた。帰還者たちの記憶ミュージアムの学芸員の方々からも情

報を提供していただき、曾祖父と同じように強制抑留の体験をされた方々に直接インタビューするという貴重な機会を得ることができた。そして、まさに今の私と同じ年代に戦争と抑留を体験された皆さんからのお話に心打たれた。直接インタビューの準備をしている際に、父が、

「インタビューの後には、しっかりと握手をして帰ってきなさい。」

と言った。最初は何を意味しているのか分からなかったが、実際に握手をさせていただいた後、その意味が分かったように思えた。記憶を継承すると同時に、平和を願う思いを受け継ぐことの大切さを身をもって感じた瞬間だった。そして、私たちの手が武器を握るためのものではなく、平和と希望を結びつけるためのものでありたいと思った。

今、この探究活動の発表会に向けて、体験者の方々の言葉とご遺族の方々からのコラムを収録した『未来に送りたいことば集』を制作中だ。校内でアンケート調査を実施し、読書離れが進む若者にも関心を持ってもらえるように、QRコードを活用してインタビュー動画や関係資料に飛ぶように工夫している。また、この探究活動をシベリア抑留についての歴史研究ではなく、抑留体験者の方々の思いを受け継ぐものにしたという気持ちで行っている。だからこそ、曾祖父が体験したシベリア抑留を通して、多くの人たちと戦争と平和について考えるきっかけ作りをこれからも続けていきたい。この活動を通して私が得たことは山のようにあるが、最も嬉しいことは、強制抑留体験者の方々だけでなく、そのご遺族や関係者の方々と繋がることができたことだ。100歳の方から、私の祖父母や両親の年代の方もおられる。そして、同じく高校生の友人もできた。半年前には道ですれ違っても分からなかった方々と、今は「強制抑留」というテーマで繋がり、これからの平和な社会に向けて話し合うことができています。

80年前、手袋を持ち帰ってきた曾祖父は想像もしていなかったと思うが、その手袋が私に素敵な友情と大きな希望を与えている。

戦争の記憶継承と地域密着型平和学習

恒松 大輝 （大学生）

戦後 80 年を迎えた今、先の大戦の記憶を継承していくために教育は大きな役割を担うと考える。中でも、平和学習を通して戦争について知り平和について考えていくことは記憶を継承し、未来に生かしていくための重要な時間となる。この時に最も求められることは、戦争を自分事として捉え平和を自分の言葉で語ることだろう。私は将来、教師として教壇に立ち、地域から学びを広げる地域密着型の平和学習を子供たちと行いたいと考える。

私は熊本県の出身で、小学校の修学旅行の際に長崎県、中学校の修学旅行では沖縄県を訪れた。平和学習の一環としての修学旅行だったため、事前学習として調べ学習を行ったり映画を見たりし、後に現地で資料館や地下壕を訪れたり語り部の方のお話を聞いたりした。これらの経験から、戦争がどれだけ恐ろしいものであるか実感し、戦争を二度と起こしてはならないと強く感じた。貴重な学びを得て平和への思いを強くすることができた一方で、この学びを振り返り、こうした平和学習の在り方には一つの危険性があるのではないかと考えた。それは、平和学習が「広島・長崎に原爆が投下され沖縄では地上戦が起こった」ということだけを学ぶものになってしまうことだ。このことは、戦争が遠い知らないところで起こったことという認識につながると考える。私は修学旅行で実際に現地を訪れ平和への願いを強くする機会を得た。それでも戦争は歴史上の出来事であるという認識は強く自分事に落とし込むことができていなかった。また、社会科教科書の記述を見て学ぶのみになった場合、この危険性はより高まると共に、記憶の継承のみならず「戦後」を継続することも難しくなるのではないかと考える。

修学旅行等での現地訪問に加え、私には戦争・平和について考えるきっかけがもう一つある。それは地元熊本県錦町の「ひみつ基地ミュージアム」訪問である。当時高校生だった私は、この訪問で初めて自分が住んでいる地域に基地があったこと、空襲があったことを知った。それまで歴史的出来事であった戦争が、身近で自分に関係あるものとしての戦争に変わった瞬間だった。通学路だった田んぼ道が一直線に伸びていたのは戦時中に滑走路として作られた道が近くにあったからだったことも、普段通る橋が基地と深い関わりがあったことも知らなかった。自分の身近に戦争があったことをミュージアムの訪問を通して知り、戦争を自分事に捉えられるようになる第一歩だった。

これまでの経験から、戦争を遠い過去の出来事にしてしまわないようにするためには、戦争を自分事として捉えることが求められると考えた。そして、戦争を自分事としながら



記憶を継承し、平和な社会を実現するために「地域密着」が1つのキーワードとなると考える。先日開催された「戦後 80 年記憶の継承シンポジウム」に参加した際、登壇者の話に平和学習において地域性を持たせて身近で具体的に戦争や平和について考えられるようにするというものがあった。これは、地域と戦争について学ぶことで戦争を自分事として捉え、記憶を継承していくことができるということだろう。ただし、「地域密着」で地域のことだけを学ぶ平和学習では、戦争を一面的な方向からしか見ることができず、世界レベルで平和を考えなければならない現代社会において不十分ではないか。地域を中心として同心円状に学びを日本に、世界に広げていく学びが「地域密着」であると考え。私の地元にも沖縄から疎開してきた人がいたように、原爆投下や地上戦の影響は決してその地域だけにとどまらず、他地域の生活にも及んでいた。教科書などで知識として学ぶことも、身近な地域との関わりに目を向けることで学びを大きく変えられるのではないかと考える。

戦後 80 年を迎え、大戦の記憶を継承し、未来に伝えていくことが大きな課題となっている。この課題に対して、学校現場で行われる平和学習は重大な役割を担うと考える。地域から広がる地域密着の学びを通して、戦争を自分事としながら知ることが必要ではないか。また、記憶の継承には起こったことをそのまま伝えることが重要となる。それに合わせて、平和学習での学びを通して平和への思いを子供たち自身が語ることができるようになることも戦争の惨禍を二度と繰り返さないために必要であると考え。私は今、教師を目指して大学で学んでいる。教師は教科での学びや平和学習などを通して大戦の記憶の継承者になりえる。その責任と自覚を持ち、まずは自分自身が戦争を知り、平和への思いを強く持ち続けたい。そして近い将来、教師として子供たちの前に立ち、子供たちと共に学び、平和について考え合えるような地域密着型平和学習を実現したい。

優秀賞

平和のために、私たちができること

西井 智央 （高校生）

「長崎に来られて本当によかった。実際に見て、聞いて、原爆がどれほど悲惨なものか知ることができて、心から感謝しているよ。」

アメリカから来た高校生が、長崎の原爆資料館を一緒に訪れた際に、目に涙を溜めながら伝えてくれた一言です。私はこの時のことを忘れないでしょう。

今年は、第二次世界大戦の終結から 80 年という節目の年です。しかし今も世界のどこかで、80 年前の日本のように、人々が戦争や紛争によって生活を奪われています。「平和」は決して当たり前ではないことを、戦争は過去のものではないことを、私たち若い世代は忘れてはいけません。

では、平和とは何でしょう。私は、「人と人との繋がりから生まれるもので、知らないことを互いに理解すること」だと考えます。

昨年、私は福岡市の親善大使として、姉妹都市であるアメリカ・カリフォルニア州オークランド市を訪れました。姉妹都市制度は第二次世界大戦後、「本当の平和は国と国だけでなく、人と人との直接の繋がりによって築かれるべき」という理念のもと、始まりました。私はこの理念に強く共感し、活動に取り組むことを決めました。そして、日本とアメリカ、それぞれの場所で、私の心を動かす、人と人との繋がりがあったのです。

オークランドでは、日系アメリカ人の方から直接お話を聞き、一緒にタンフォランメモリアルを訪れました。戦時中、アメリカでは 12 万人以上の日系アメリカ人が、強制収容されました。真珠湾攻撃を受けて広がった、恐れや偏見によるものでした。ただ日本人の血を引いているという理由だけで、彼らは不衛生な馬小屋での生活を強いられ、自分たちが築き上げた事業や財産を失ったのです。私はこの体験にとっても心を揺さぶられました。私はこれまで、学校で戦争についてたくさん学び、「知っている」と思っていました。しかし、そうではありませんでした。戦争にはたくさんの物語があり、その一つ一つの物語に「人」がいるのです。

帰国後、私は日本から交流を支える立場になりました。今年の夏、オークランドの高校生が来日し、一緒に長崎を訪れて、平和学習をすることができました。

原爆資料館では、被爆して変形した鉄骨や瓶、原爆によって亡くなった方々の映像、原爆の後遺症の写真などを目の当たりにして、改めてその悲惨さを実感しました。原爆の被害に遭った方々、一人一人の物語に思いを馳せ、どんな理由があっても、原子爆弾を投下してはいけない、戦争を起こしてはいけないと、強く感じました。オーク

ランドの生徒達は、資料館の展示を一つ一つ真剣に見ながら、「今まで知らなかった。」と衝撃を受けている様子でした。

また、被爆者の娘さんが平和への願いを語っていただきました。その方のお母さんは原爆の後遺症で、ご自身が高校生のときに亡くなったそうです。私たちは、共に話を聞き、質問をしました。その方がおっしゃった、「戦争にはたくさんの視点があり、どれも間違っていない。大切なことは、私たちが学び、それを周りの人に伝え、共有していくこと。」という言葉がとても印象に残っています。

彼らは、この体験に感動し、被爆者の娘さんにハグをしました。その瞬間、国籍や年齢を超えて、平和が分かち合われたのを感じました。私たちは共に過去と向き合い、彼らは知らなかったことを認め、理解しようとしていたのです。

平和を築くには、それぞれの国で語られる歴史を知っているだけでは足りません。お互いの物語を共有し、知らない「真実」に耳を傾け、自分の目で、心で、体で感じる必要があります。この出会いを通して、私は確信しました。国と国だけの関係ではなく、「人と人との繋がり」こそ、世界を近づける、平和へと導く力を持っているのです。

私たちの力で、今起きている戦争をすぐになくすことはできません。しかし、今ある平和を維持し、その輪を広げ、これからの戦争を防ぐことは私たちにもできることなのです。国を超えて人々が繋がることこそが、平和の維持をもたらします。

だから私は、次の世代も私のように心を動かす国際交流の機会を持てるよう、これからも姉妹都市交流の活動を続けます。

平和を築くために、私たち若い世代の一人一人が、国を超えて過去の戦争の記憶を先人に学び、共有し、継承していかなければいけません。まずは YouTube でもいいのです。知らないことに向き合う一歩を踏み出してください。あなたの一歩が、誰かの新たな一歩を生み、小さな繋がり世界を結ぶ力になります。その積み重ねこそが、平和への確かな道を作っていくのではないのでしょうか。